

漢法苞徳塾資料	No. 542
区分	基礎理論・五邪論
タイトル	五十難の五邪論を巡って
著者	八木素萌
作成日	2002.01.04

【原文】

五十難曰

病有虚邪 有実邪 有賊邪 有微邪 有正邪 何以別之。

然 従後來者为虚邪 従前来者为実邪 従所不勝来者为賊邪 従所勝来者为微邪

自病者为正邪 何以言之 仮令心病 中風得之為虚邪 傷暑得之為正邪

飲食勞倦得之為実邪 傷寒得之為微邪 中湿得之為賊邪。

【訓】

五十難曰

病ニ虚邪有リ 実邪有リ 賊邪有リ 微邪有リ 正邪有リ 何レヲ以ッテカ之レヲ
別ツヤ？

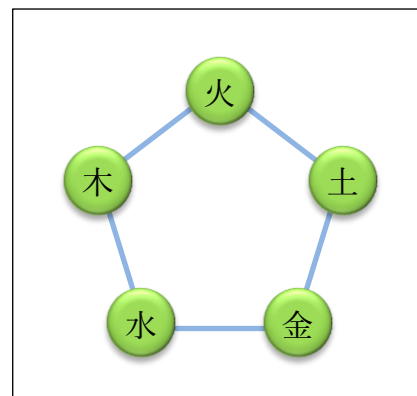
然ウ 後 従リ来ル者ハ虚邪ト為シ 前 従リ来ル者ハ実邪ト為シ 勝不ル所 従リ来ル者ハ
賊邪ト為シ 勝テル所 従リ来ル者ハ微邪ト為シ 自ラ病メル者ハ正邪ト為ストハ
何カ以テ之ヲ言ンヤ 仮令心病ノ 中風ニ之ヲ得タルヲ虚邪ト為シ 傷暑ニ之
ヲ得タルヲ正邪ト為シ 飲食勞倦ニ之ヲ得タルヲ実邪ト為シ 傷寒ニ之ヲ得タル
ヲ微邪ト為シ 中湿ニ之ヲ得タルヲ賊邪ト為スナリ。

【訳】

病を虚邪とか実邪とか賊邪とか微邪とか正邪とか表現しているものが見られます、これはどう
いうことでしょうか？また、それにはどんな区別があり、また、意味合いにどのような違いが
あるものでしょうか？

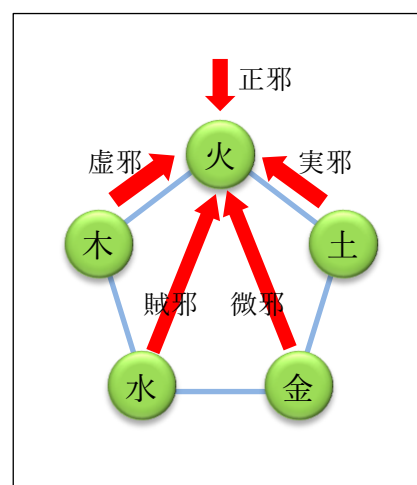
お答えしましょう。心病を例にとって考えましょう。此処には二つの方向からの説明がありま
す。一つは五行論的な循環の方面からのものです。いま一つは、病因との関係から見ている面
があります。しかも、この二つの側面は、極めて密接に関係し、相互に内面的に包摂しあって
います。そういう色合いを示している記述です。

五行論的な循環は、「木→火→土→金→水→木→……」のような円環ですが、この円環的な関係の他に、母子関係・相剋関係・相生関係などもあります。例えば、木の母は水ですが、水にとって木は子の位置にあります。木は土を制剋しますが、金からは制剋されています。木→火の循環局面では火にとって木は後に位しています。火→土の循環局面では火は土の後に位しています。また火は木の前という位取りです。このような五行の相互関係に関する表現を正確に理解して、この文章を読む必要があります。



同時に病因の五行論的な表現も知っていなければなりません。中風は風邪という木邪に冒された病です。従って心という「火」の蔵が「風」という「木性の邪」を病因としています。つまり木→火の関係にあります。後つまり木は火の後にあるのです。だから此处では「風邪」は心にとっては〔虚邪〕に当たります。

傷暑はここでは、「暑」という「火性の邪」に心が冒された病です。つまり火→火の関係です。自ら病むつまり〔正邪〕です。



飲食労倦は「土性の邪」の病因です。つまり火←土という関係です。「土邪」は「火」の蔵にとっては循環的に前に位置しています。つまり〔実邪〕です。

傷寒は「金性の邪」です。つまり金→火の関係です。火が金に侮られています。つまり〔微邪〕に当たります。

中湿は「水性の邪」です。つまり水→火の関係です。乗ぜられています。つまり制剋を被っているので〔贼邪〕です。

このように病蔵と病因の関係と、その相関的な性質が記述されているのです。

【問題点や関連している難について】

- ①関連の深い難……10 難、13 難、34 難、49 難、53 難、54 難
- ②所謂、虚邪、実邪、贼邪、微邪、正邪などの表現は、病因と病蔵の相互関係が病の軽重や、邪気の病蔵への作用特性や発病の状況などを表現することになっている。

③注意しなければならないのは、『難経』と『黄帝内经』の間の用語の違いという問題である。
それは、次の通り。

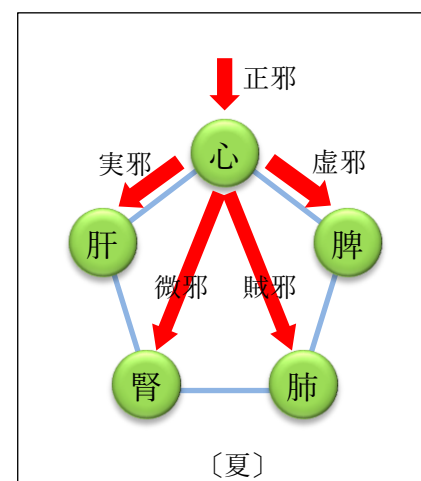
	火邪	土邪	金邪	水邪
『難経』	暑	飲食労倦	傷寒	中湿
『黄帝内经』	熱	湿	燥	水(寒)

④後代に六淫と季節の関係に関する認識が深まって、一年を六季に区分して病に対処する論が明快になっている。これ既に金元四大家の頃には歴然としている。そして三陰三陽論との結びつきも緊密になっている。

初之気	二之気	三之気	四之気	五之気	終之気
風	熱	暑	湿	燥	寒

時気五蔵五邪相関表：A

	正邪	虚邪	賊邪	微邪	実邪
春	風木→肝	風木→心	風木→脾	風木→肺	風木→腎
夏	熱火→心	熱火→脾	熱火→肺	熱火→腎	熱火→肝
長夏	湿土→脾	湿土→肺	湿土→腎	湿土→肝	湿土→心
秋	燥金→肺	燥金→腎	燥金→肝	燥金→心	燥金→脾
冬	寒水→腎	寒水→肝	寒水→心	寒水→脾	寒水→肺



時気五蔵五邪相関表：B

	正邪	虚邪	賊邪	微邪	実邪
春	風木→肝	寒水→肝	燥金→肝	湿土→肝	熱火→肝
夏	熱火→心	風木→心	寒水→心	燥金→心	湿土→心
長夏	湿土→脾	熱火→脾	風木→脾	寒水→脾	燥金→脾
秋	燥金→肺	湿土→肺	熱火→肺	風木→肺	寒水→肺
冬	寒水→腎	燥金→腎	湿土→腎	熱火→腎	風木→腎

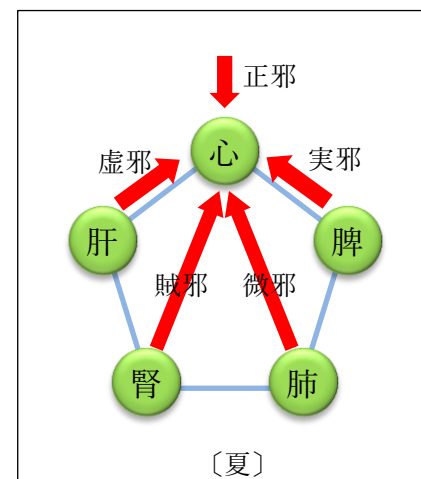


表 1

	旺	相	死	囚	休
春	肝	心	脾	肺	腎
夏	心	脾	肺	腎	肝
長夏	脾	肺	腎	肝	心
秋	肺	腎	肝	心	脾
冬	腎	肝	心	脾	肺

表 2

	旺	相	死	囚	休
春	木	火	土	金	水
夏	火	土	金	水	木
長夏	土	金	水	木	火
秋	金	水	木	火	土
冬	水	木	火	土	金

表 3

	肝	心	脾	肺	腎
春	旺	相	死	囚	休
夏	休	旺	相	死	囚
長夏	囚	休	旺	相	死
秋	死	囚	休	旺	相
冬	相	死	囚	休	旺

表 4

	旺	相	死	囚	休
春	風	熱	湿	燥	寒
夏	熱	湿	燥	寒	風
長夏	湿	燥	寒	風	熱
秋	燥	寒	風	熱	湿
冬	寒	風	熱	湿	燥

【関連難の論点について】

- 1 0 難……心脈を例にとって「一脈十変」を論じ、それは「五蔵各有剛柔邪」〈五蔵に各々剛柔の邪有り〉に由来するので「一脈が十変する」ということを論じている。
- 1 3 難……色脈の相剋は死・相生は生。五蔵の色と脈状の記述。『靈樞』邪氣蔵府病形第 4 の記述と緊密な関連あり。尺膚の状態と脈状の対応を記述。「五蔵各有声色臭味・当与寸口尺内相応・其不相応者病也。……」色脈の相剋の二種類・色脈の相生の二種類を記述する。五邪論から具体的な解釈が可能。
- 3 4 難……五蔵の声色臭味液を記述。『素問』陰陽応象大論第 5、金匱真言論第 4、宣明五氣第 23 の記述と緊密な関連。それらと七神と蔵との関係を論ず。
- 4 9 難……正経自病→内傷のみならず天の時令の六淫によるものでないものも含ませている。五邪を中風・傷暑・飲食勞倦・傷寒・中湿と数える。病因診断論の基本原則を述べている。李東垣の有名な注釈あり。塾資料参照のこと。
- 5 3 難……間蔵と七伝と生死の区別を論ず。間蔵は母子関係での伝変で生、七伝は相剋関係での伝変で死、を述べる。
- 5 4 難……前の難を承けて、蔵病は相剋関係での伝変＝七伝であり、府病は母子関係での伝変＝相生的な伝変を論じ「蔵病難治・府病易治」と言う。